

ヘーゲル『大論理学』の研究 12

伊藤一美

A Study of Hegel's "Science of Logic" 12

Kazumi ITOH

Abstract

The Idea is unity of the Notion and the Objectivity. At first the Idea is an immediate Idea, and is also the Life. First the Life unites a soul (the Notion) and a body (the Objectivity). Therefore the Notion is realized as a soul in the body. The Life is the living Individual. Secondly the Life relates to the objective World as a living Individual, and it converts the World into a means for the Life itself, namely, the Life objectifies itself. The living Individual becomes the universal Life, which is the Genus. Thirdly there exist relationships between male and female. In copulation the immediacy of the living Individuality perishes, the death of this Life is the procession of spirit. The Idea, which as genus is implicit, is now explicit.

第三編 理念 Die Idee

「理念は十全な概念 der adäquate Begriffであり、客観的真理であり、真理そのものである。何ものであれそれが真理をもつとすれば、それはその理念によって真理をもつ。換言すれば、何ものでもそれが理念であることでのみ真理をもつ。⁽¹⁾」— 理念という表現を理性概念の意味として確立したのがカントである。カントは理性概念を無制約者についての概念とし、超越的 *transzendent* であるとした。理性概念は概念把握に役立つ。悟性概念は知覚を理解するのに役立つ。しかし、悟性概念も概念といわれる以上、やはり概念把握である。理解すること、ただ全体と部分、力、原因等によって知覚を規定するというような理解であれば概念把握とはいえない。また、ある感性的内容を一定の仕方で表象することである場合も同じである。理性概念はこのようなものではない。理性概念ということ自体不適当な表現といえる。概念は一般的に理性的なものであるからである。理性は概念と客観性との総体性である。— この意味で理念は理性的なものである。— 理念は無制約的なものである。元来、客観性と関係しているものはいろいろな制約をもつ。それも、そのもの自身によって規定されている客観性でなく、外的目的がもっていた客観性のように、自分へと関係しているものに対して無関心性（無頓着さ）と外的あり方しかしていないという客観性と関係しているものだけが制約をもつ。理念はそういったものではない。

理念は客観的概念、実在的概念を意味している。それ

は、概念そのもの、単なる表象ともちがう。だから、理念が非現実的、主観的、偶然的なものでしかない、というのも誤解である。また逆に、理念は超越的 *transzendent* だから真理ではないという。また理念にはそれに合致する感性のいかなる対象も与えられえないから真理でないともいう。しかし、これらは誤解である。というのは、理念には現象が欠けているということで理念の客観的妥当性を否認しているからである。カントは実践的理念に関してこういつていた。実際に矛盾していないのに経験に矛盾しているとして理念に反対することほど有害なものはない。例えば、国家の諸制度が理念にしたがって実現されておれば、また理念に代わる粗野な概念が経験から汲みとられたということであらゆる善良な意図を否定してしまうことさえしなければ理念と矛盾するような経験などはないと。カントは理念を必然的なもの、目標とみていた。目標とは格率の原型であり、現実の状態をそれに近づけようとする努力である。だから、理念は現実的でもあり、超越的でもある。

このように理念とは概念と客観性との統一である。単なる目標、彼岸物ではない。対象、主観的世界、客観的世界が理念と一致すべきだというだけでなく、それら自体が概念と実在性との一致である、ということである。すべての現実的なものが存在しているのは、それが理念を自分のなかにもち、理念を表わしているからである。概念と一致していないような実在性は単なる現象であり、主観的なものであり、恣意的なものでしかない。たしかに、経験のなかには理念と完全に一致する対象はないと言われたりもする。このとき理念は一つの主観的尺

度として現実的なものに対立させられている。しかし、現実的なものが何かということが語られるのはそのもののなかにその概念が内在しているからだ。たしかに、機械的客観、化学的客観には概念が自由な固有な形式で内在してはいない。しかし、これらの客観が概念と実在性との統一であるかぎり、自分の魂と自分の身体との合一である限りでのみ、これらの客観は真でありうる。国家や教会もその概念と実在性との統一を失なったとき現実存在しえなくなる。心と肉とが分離したとき人間は死ぬ。機械的、化学的世界は死した自然で主観的抽象でしかない。というのも、概念と実在性とが区分されているからである。理念なき、概念との統一なき精神は死んだ精神であり、精神なき精神であり、物質的客観にすぎない。

存在は真理の意味を獲得したが、それは理念が概念と実在性との統一であるということによってである。存在はいまや理念そのものである。有限なものが有限なのは、それらには概念が実在していないからだ。だから他のものを必要とする。あるいは概念を外的なものとしているだけだ。このような有限な諸物がもつ最高のものは外的な合目的性である。理念と一致しないところにこれらのものの有限性がある。だから、これら現実的諸物は客観であり、機械的、化学的に、あるいは外的目的に規定されているにすぎない。こうしたことは理念がその実在性を完全に仕上げていないということ、概念が実在化していないということである。しかし、このことは理念が本質的に概念と実在性との統一であるが、同時に本質的に区別でもあるということに基づいている。というのは客観は直接的な、即自在的統一 *die ansichseiende Einheit* にすぎないからだ。だがたとえば、国家が理念に適合していなかったり、あるいは国家の実在性である諸個人が概念と一致していないときは、国家の心と肉体とは分離していることになる。その時魂は思想という分けへだてられた領域に飛び去り、肉体は個別的個体に分解する。しかし、国家の概念は本質的に個人の本性を構成するから、その概念は諸団体のなかにきわめて大きな衝動として存在する。そのため諸個人はこの概念を、たとえ外的合目的性の形式にすぎないとしても実在化しようとし、あるいはその概念に満足を与えるようにせざるを得ないことになる。さもないと諸個人は滅亡せざるを得ないであろう。その実在性が概念と少しも一致しない国家が、最悪の国家だが、それでも諸個人は威力をもった概念に服従せざるを得ない。

理念は真なる存在、すなわち概念と実在性の統一だというより一般的な意味をもっているだけではなく、主観的概念と客観性の統一でもあるというより規定された意味をもっている。すなわち、概念そのものが自分と実在性との同一性である。というのは、実在性とは規定された存在そのもので、概念はこの規定された存在を特殊性と個別性としてもっているからである。さらに同じく客観性とは自分の規定性から自分との同一性へと帰一

した総体的概念である。先きの主観性からのつながりでおさえおくと、そこでは概念の規定性、あるいは区別とは仮象だった。こうしてそれは向自存在 *das Fürsichsein*、あるいは否定的統一へと還帰した。内属する述語となった。理念とは、いまや客観性のなかに沈没していた状態から解放されて現われた概念である。概念は客観性から自分を分かち。しかし、客観性は概念によって規定され、自分の実在性を概念のなかにもつ。ここに同一性があるのだが、その同一性とは主観 — 客観と規定されたものである。この同一性は形式的、主観的概念であり、客観そのものでもある。それは次のようなことである。形式的、主観的概念がその実在性に到達したことで概念は真につきのような絶対的判断(原始分割) *dies absolute Urteil* である。その主語(主観)は自己否定的統一で、自分の客観性と自分とを区別している。しかし同時に主語(主観)はこの客観性のそれ自体で自立的な存在でもある。だから、本質的に自己自身を通じてこの客観性と関係している。かくして、主観(主語)は自己目的であり、衝動である。だが主観は直接的に客観性をもたない。そうでないと主観(主語)は客観性のなかへと消失した客観そのものの総体性となってしまう。しかしそうではなく客観性は目的の現実化であり、目的の活動性によって措定されたものである。だから主観に貫徹されたものである。また、客観性は客観性として概念の外面性という契機をもつ。有限性の側面で、変化と現象の側面である。しかし、これらは概念が否定的統一に帰するというもののなかで没落する。この否定性によって、客観性の無関心的な相互外的存在(分離性)が非本質的なもの、措定されたものとして現われる。それゆえ、理念は客観性にもかかわらず非物質的である。けれど、外面性は概念の否定的統一のなかに吸いこまれているからである。だから、理念がその実在性を物質的なものの形のなかにもっているとしても、このものは概念に対して自立的なものとしてあるのではない。そうではなく生成としてのみある。つまり、無関心的存在を否定することで生じる概念の単純な規定性としてある。

ここから理念の諸規定が生じる。(1) 第一に理念は概念と客観性との同一性であり、普遍であり、普遍は対立と特殊とを自己同一的否定性のなかで解消し、自分と同等のものとしている。(2) 第二に理念は単一な概念の自立的に存在する主観性 *die fürsichseiende Subjektivität* とこの主観性から区別された客観性との関係である。主観性は、本質的に衝動であり、この分離を揚棄しようとする。客観性は無関心的な措定された存在 *das gleichgültige Gesetzsein* であり、それ自体で自立的に無的な存立 *das an und für sich nichtige Bestehen* である。理念は、この関係として過程である。つまり自分を個性性と非有機的自然とに分離するとともに、再びこれらを主観の下に連れもどし、こうして最初の単一な普遍性へと還帰するという過程である。(3) 第三に、理念の自己同一性はこの過程と一つのものである。それは現実性を目的を欠いた可

変性の仮象から解きはなし、理念へと変容さすということである。このことは現実性というものを死した静止や衝動と運動もない生氣のない単なる像 *ein blosses Bild* と考えてはならないし、また精霊や数や抽象的思想としてははらないということである。「理念は概念が理念のなかで獲得している自由のために自分のなかにきわめて烈しい対立をもっている。理念の静止はその安定性と確実性のなかに成立するのだが、その安定性と確実性とは理念が対立を永遠に産出するとともに永遠に克服し、対立のなかで自分自身と一つになるということである。⁽²⁾」

しかしはじめには、理念は直接的であるにすぎない。自分の概念のなかにのみある。客観的実在性は、なるほど概念に適合しているが、しかし解放されて概念とはなっていない。だから、概念も自立的に存在していない。こうして概念は魂である。しかし、魂は直接的で、魂の規定性は魂そのものではない。概念はまだ魂のこもっていない魂としてである。

こうして、(1) 第一に理念は生命 *das Leben* である。次のような概念である。自分の客観性から区別されつつその客観性を貫徹しており、自己目的であり客観性のなかに手段をもち、また客観性を手段として措定するが、しかしこの手段のなかに内在し、手段との同一性を実現している目的であるという概念である。だが、直接性のため個別性の形式にある。理念の過程はこれを揚棄す。こうして、直接的個別性のなかで普遍性として内なるものである概念は外面性を普遍性とする。客観性を同等性とする。こうして理念は

(2) 第二に真なるものと善なるものの理念で、認識や意欲である。しかし、いまだ両者は区別され、ただ目標としてある。つまり、最初には有限な認識と有限な意欲とである。概念ははじめには自分を自分自身へと解放し、自分に抽象的客観性を実在性として与えた。しかし、このような有限な認識と有限な行為の過程がはじめには抽象的普遍性を総体性たらしめる。そうすることでこの抽象的普遍性は完全な客観性となる。— 換言すれば、主観的精神は客観的世界を前提にする。つまり生命も後者を前提とする。主観的精神の活動性はこの前提を揚棄する、そして措定されたものとする。こうして、この精神の実在性は客観的世界であり、あるいは逆に客観的世界が観念性であり、そのなかでこの精神は自分を認識する。

(3) 第三に、精神は理念を自分の絶対的真理として認識する。それは無限な理念である。そのなかで認識と行為とは有和(調和)される。無限な理念はそれ自身の絶対知である。

1 生命(生きたもの) *Das Leben*

理念はまずさしあたり直接的なものである。しかし、この理念も概念の固有な必然性によって導き出されたものである。かくして、理念は絶対的真理 *das an und für sich Wahre* であり、論理学の対象である。しかし、理念

はまずその直接性において考察されるべきである。直接的理念は生命である。

論理学的生命は自然哲学のなかでの自然生命、また精神と結びついている生命とは異なる。自然生命とは自然の生命としての生命である。自然の最高段階として現出したものである。この生命は外的自然のなかに投げこまれ、非有機的自然によって制約されている。また、この生命の現実的、具体的形態の多様性が理念の契機となっている。これに対して理念としての生命は概念である。一方では主観的概念であり、他方では客観的概念である。つまり、論理学での生命は、一方では単一な自己内存在 *das einfache Insichsein*、主観的概念であるが、同時に外面性(客観性)を獲得したものでもある。というのは概念は主観的概念として登場したのだが、客観性と統一されたものとなっているからだ。これが理念としての生命である。概念は生命の魂であり、衝動である。概念は客観性をつらぬいて、それを自分の実在性とする衝動である。生命の理念はここでとどまる。つまり、概念の形式のなかにとどまる。しかし、自然は生命に到達したとき自分を越える。「自然の終りは自然の始めとしてではなく、そこで自然が自己自身を揚棄するところの自然の限界としてある。⁽³⁾」

精神のなかでの生命は、一方では精神と対立し、他方では精神と一つのものでされる。したがって、ここでの生命とはいわゆる自然生命である。というのは、精神とは生命の特有性 *die Eigentümlichkeit* であり、単なる生命に対立するものだからである。また、精神は自然的なものではなく自然と対立している、ともいわれる。このとき生命は精神の手段である。精神は生きた個体であり、生命は精神の身体である。他方、精神と身体との統一は精神から生れた理想だという。論理学的生命はこのようなものではない。生命は精神の手段でも、美の契機でもない。— こうみると、自然生命でも精神と関係している生命でも共に生命が外面性という規定性をもっている。前者では自然そのものから、後者では精神の目的と活動から規定性が生じている。「生命の理念そのものは、かの前提され制約する客観性から自由であり、同様にまたこの主観性(精神の目的と活動)への関係からも自由である。⁽⁴⁾」

生命はその理念からすればそれ自体で自立的に絶対的な普遍性 *die an und für sich absolute Allgemeinheit* である。生命の客観性は概念によって貫かれている。客観性の実体は概念である。部分や外的反省によって生じている多様性(諸区分)は、それら自身のなかに概念をもっている。この概念はそれらの魂である。この魂は単一な自己関係である。だから、客観的存在である多様性のなかにあっても一つのものである。この多様性は無関心的(無頓着な)ものである。これらは全く異なる自立的な相互外在である。分散的なものである。だが、こうした外面性は生命概念の単一な規定態でもある(生命概念を構成するものでもある)。だから魂はこの多様性そ

のものに遍在している。同時に魂とは具体的概念が自己自身と一体となっていることである。— 生命概念とはこのような統一である。客観性の外面性のなかで、また原子論的物質の絶対的多様性のなかでの統一である。しかし、このような統一においてある生命の思想は、反省諸関係の諸規定と形式的概念の諸規定とにこだわる思考によっては全く把握され得ない。反省にとっては、単純なものが多様な外面性のなかに遍在するということは絶対的矛盾 *ein absoluter Widerspruch* である。またこの遍在は反省にとってはとらえがたき秘密である。というのは、反省は概念を把握せず、概念を生命の実体として把握しないからである。— しかし、単一な生命は遍在的でありつつも、生命の客観性の存立であり、内在的実体である。だが、また主観的実体でもあり、その点では衝動である。しかも特殊的区別にもとづく種的な衝動である。また同じように種的なものの一つの普遍的衝動である。しかし、この衝動は特殊化を統一のなかに保つ。

「生命はその客観性と特殊化との統一であり、自己関係的な、自立存在する生命であり、一つの魂である。したがって、生命は本質的に個別である。個別は他者に、生命なき自然としての客観性に関係する。⁽⁹⁾」ここに生命の根源的判断 *Das ursprüngliche Urteil* が成立する。まず、生命が個別的主観として自分を客観から分離する。そして同時に生命が自分を概念の否定的統一として構成しながら自分を直接的客観性の前提となす。これが根源的判断である。

生命はそれだから第一に、生命のある個体 *das lebendige Individuum* として考察される。それはそれ自身主観的総体性である。生命ある個体は自分に対立している客観性に対して無関心（無頓着）である。

第二に、生命は生命過程 *der Lebensprozess* である。つまり、前提である客観性を揚棄することである。そうすることで自からを客観性の力として、否定的統一として現実化する。

こうして第三に、生命は類の過程 *der Prozess der Gattung* である。生命の個別化を揚棄し、自分自身としての自分の客観的定在にかかわる。こうしてこの過程は、一方では生命の概念への還帰であり、最初の切りはなし *die erste Dirmention* の反復であり、新しい個体の生成でもあり、最初の直接的個性の死でもある。他方では、自分へと復帰した生命の概念 *der in sich gegangene Begriff des Lebens* は自分自身に関わっており、かつまた普遍的にかつ自由にして自立的に存在している概念である。すなわち認識への移行である。

A. 生命のある個体 *Das Lebendige Individuum*

1. 生命の概念（普遍的生命）は直接的理念である。自分と合致している客観性をもつ概念である。しかし、客観性が概念と合致するのは、ただ概念がこの客観性（外面性）を否定的に統一しているかぎりである。即ち、概念が客観性を自分自身と一致するものとして措定す

るかぎりである。だから、このことは概念の自分自身との無限な関係である。ということはそれはまた、概念が否定性として自己規定すること、主観的個性としての自分と無頓着な（無関心的）普遍性としての自分へと自分を分離することである。生命の理念は直接性としてあり、まず創造的な普遍的な魂である。そこで理念は自分に否定的に関わる。それが理念の概念としての自己規定である。この否定的関係は措定そのものである。措定それ自身、理念の自分への還帰であり、ようやく向自存在 *das Fürsichsein* である。そして措定することは創造的前提作用である。この自己規定によって普遍的生命は一つの特的なものとなる。こうして普遍的生命は二分され、判断の両項となる。この判断は推理となる。

対立する二規定というのは概念の普遍的な二規定のことである。概念には二分が属している。この二分の充実が理念である。理念は概念と実在性との統一である。この統一は理念であるが、しかし直接的理念にすぎない。前の客観性のところでみられたものともいえる。すなわち、概念が実在性のなかに移行し、そのなかで消失した。そこでは、概念は実在性に対立せず、実在性の内なるものにすぎなかった。だから、かの客観性は直接的なあり方における直接的なものそのものであった。しかし、ここでの客観性とは概念から出てきたものである。それゆえ、その本質は措定された存在である。つまり、客観性是否定的なものである。— この客観性は概念の普遍性の側面と見なされるべきである。また従って抽象的普遍とみなされるべきである。なぜ抽象的普遍であるかという、この客観性は本質的に主観のみ属し、しかも自立的に措定されていて、主観に対して無関心的（無頓着）であるという直接的存在の形式のうちにあるからである。それゆえ、この客観性は理念から生じたものであるが直接的存在である。概念の自己規定としての判断の述語にすぎないという意味で。— つまり、たしかに主観から別れた存在だが、しかし同時にまた本質的に概念の契機として措定されたものである。

内容からすれば、この客観性は概念の総体性であるが、しかし概念の主観性、または否定的統一と対立している。同時に両者は概念の自分自身との自由な統一である。それは主観 *das Subjekt* であり、理念である。この主観は自分との単一な、だが否定的な同一性としての個性の形式における理念である。生命のある個体である。

生命のある個体は第一に魂としての生命である。規定された概念で、運動する原理である。概念は単一性のうちにありながら、一定の外面性を単一な契機として自分のなかにとじこめもっている。— しかし、さらに第二に魂は直接的に外的で、客観的存在を自分自身のもとにもつ。その客観的存在は目的に従属した実在性であり、直接的手段であり、さしあたり主語の述語として客観性である。さらに、客観性は推理の媒辞でもある。この客観性、すなわち魂の身体性は魂が外的客観性と結合するためのものである。身体性は生命あるもの（実在的生物

体)をさしあたり概念と同一的な実在性としてもっている。それゆえ、身体性はこの実在性を自然から与えられたものとしてもっている。

この客観性は個体の述語である。主観的統一のなかへと入っているから機械的、化学的關係には属さない。また部分と全体との抽象的な反省関係にも属さない。もしそういう関係に属すとすれば、客観性はもはや生命のある定在ではない。また、概念は生命あるものにとって外的なものとなり、生命のあるものは死物となる。しかし、ここではそうではない。概念は生命のあるものに内在する。だから、生命のあるものの合目的性は内なるものとされる。概念は生命のあるもののなかで規定された概念であり、概念の外面性から区別されつつ、同時に外面性を貫通している。自分と同一的な概念である。生命あるもののこのような客観性は有機体 *der Organismus* である。このとき客観性は目的の手段であり、道具である。完全に合目的である。というのは概念が客観性の実体だからである。このとき、手段と道具とは実現された目的であり、主観的目的は直接的に自分自身と結合されている。有機体をその外面性からみれば諸部分からなる多様ではなく、肢体の多様である。諸肢体そのものは (a) 個性のなかでのみ成立している。諸肢体は可分的である。というのも諸肢体が外的諸肢体であるからだ。外面性のもとで把握されるかぎりそうだ。しかし、諸肢体が分離されるかぎり、通常の客観性の機械的、化学的諸関係に戻ってしまう。(b) 諸肢体の外面性は生命ある個性の否定的統一と対立する。この生命ある個性は、それゆえ概念の規定性のもつ抽象的契機を実在的区別として措定する衝動である。つまり、この区別は次の意味でそれぞれの個別的な種的諸契機の衝動である。すなわち、この区別は自己を産出し、同じく自分の特殊性を普遍性へともち上げようとする、また自分にとって外的である他の諸契機を揚棄し、これら諸契機の犠牲の上に自分を生み出すが、しかし同じように自分自身を揚棄し自分を他の諸契機のための手段とする、こういう衝動である。

2. 生命のある個性のこの過程は個性そのものに限られており、個性の内部に含まれている。— ちょうどそれは外的合目的性の推論と同じである。というのは、この推論の第一前提では目的が直接に客観性に関係しており、客観性は手段となるということだった。しかし、目的は客観性のなかで自己同等にとどまり、かつまた自分へと還帰しているが、しかし客観性は揚棄されず、目的は客観性のなかにそれ自体で自立的に *au und für sich* 存在するものとはならなかった。そして、目的がそれ自体で自立的であることは結論命題においてはじめて成立するということがあった。生命あるものの過程の前提もこの前提と同じである。しかし、前提が同時に結論だという限りにおいてである。というのは、主観が客観性に対してもつ関係が客観性を手段、道具とするとともに、概念自身の否定的統一であるからである。目的はこのような目的の外面性において自己を実現する。それは

目的が外面性の主観的力であり、目的の外面が自己を解消し、目的の否定的統一へと還帰する過程だからである。生命あるものの外的側面の動揺(不安定)と変化は概念が生命あるものにおいて顕現しているということである。つまり、概念が否定態として客観性をもつものは客観性の無関心的存立(無頓着な有り様)が自己揚棄するものとして自分を示すときである。こうして概念は衝動によって自分を産出する。だが、概念がその所産の本質だから所産自体が産出者である。所産は自己を否定的に措定する外面性である。換言すれば、所産は産出する過程としてのみ所産である。

3. いま考察した理念は生命のある主観の概念とその過程の概念である。そこには相互に関係している二規定がある。二規定とは概念の自分自身へと関係している否定的統一と客観性である。客観性とは概念の手段だが、そのなかで概念は自己還帰している。これら生命の理念の二契機は、生命の実在性の中にある生命のある個体 *das lebendige Individuum* のもつ規定された概念の両契機ではない。生命という理念の二契機で生命の概念のなかにあるものである。しかし生命のある個体の客観性ないし身体性は具体的な総体性である。両契機は生命のあるものを構成している。だから二契機はもはや理念の二契機ではなくなっている。だが生命ある客観性は概念によって魂をふきこまれているから、概念を実体としているから普遍性、特殊性、個別性という概念の諸規定をもっている。こうして、諸形態はこの三規定にしたがって区分、分節されている。

したがって、個体の生きた客観性は第一に普遍性 *die Allgemeinheit* である。この客観性は生命態の標えであり、感受性 *die Sensibilität* である。普遍性の概念はすでにのべたように単一な直接性である。しかし、自分自身のなかにある絶対的な否定性であり、そうであってのみ直接性である。したがって、普遍性の概念は絶対的区別をもつ概念である。概念の否定性が単一性のなかで溶解され、自分自身と等しくなる。このような絶対的区別の概念は感受性において直観される。感受性は自己内存在(内面性)である。しかし、抽象的単一性ではない。無限に規定可能な受容性である。受容性は多様性と外面性となることなく自分に反省している。受容性は単一な原理である。だから、個々の外的規定性、いわゆる印象 *der Eindruck* は外的な多様な規定から自己感情の単一性のなかへともどってゆく。感受性は、こうして自己のなかにある魂の定在とみなされる。「というのは、魂はすべての外面性を自分のなかにとりこむが、しかしこの外面性を自己同等的な普遍性のもつ完全な単一性に還元するからである。⁽⁶⁾」

概念の第二の規定は特殊性 *die Besonderheit* で、措定された区別の契機である。否定性の開披 *die Eröffnung* である。否定性は単一な自己感情のなかに閉じこもっており、換言すれば自己感情のなかで観念的で、いまだ実在的ではない規定性である。そういう否定性の開披が第二の規

定である。それは刺激受容性（興奮性）*die Irritabilität* である。つまり感情はその否定性という抽象のゆえに衝動である。感情は自己を規定する。生命あるものの自己規定は生命あるものの判断であり、有限化である。それによれば生命あるものは客観性である外面的なものに関係し、それとの交互作用のなかに入る。— 生命あるものはその特殊性の面では、一方では生命のある他の諸種と並ぶひとつの種である。ここに無関心的（無頓着な）差異性がある。それが自己へと形式的に反省する。ここに形式的類 *die formale Gattung* が生じる。つまり、類の組織化である。個別反省といえるものである。だが、他方では個別反省とは特殊性のもつ外部への方向という規定性を否定するものであり、概念が自分自身に関係するという否定性である。

生命あるものは自己へと反省して個別となる。したがって第三の規定として生命あるものは個別 *das Einzelne* である。より詳しく規定するとこの自己内反省は次のようになる。生命あるものは刺激受容性として自分自身に対して外的である。また自分が手段、道具としてもっている自分の客観性に対しても外的である。対峙している。自己内反省はこの直接性を揚棄する。— この自己内反省は、一方では理論的反省である。否定性が感受性という単一な契機であるかぎりである。この単一な契機が感受性の中で考察され感情をつくる。— 他方では、自己内反省は実在的反省としてある。というのは、概念の統一は概念の外的客観性のなかで否定的統一として措定されるからだ。そしてこれが再生 *die Reproduktion* である。— はじめの二契機、すなわち感受性と刺激受容性とは抽象的諸規定である。生命は再生において具体的なものであり生命のあるものである。こうして、生命は感情と抵抗力をもつ。再生は感受性の単一な契機として否定性である。刺激受容性が生きた抵抗力にすぎないので、外的なものとの関係は再生であり、また自分との個別的同一性である。だから、個別的契機はすべての諸契機の総体性である。これを区別するのは形式規定である。形式規定は再生のなかで全体の具体的総体性として措定されている。それゆえ、全体は一方では第三のもの、実在的総体性で、さきに規定された両総体性と対立している。しかし他方では、この全体は両総体性の本質であり、両総体性を契機として統一している。この全体は両者の主体であり、存立である。

再生は個別性の契機であり、再生とともに生命あるものは現実的個別性となる。それは自己へと関係する。向自存在（自立存在）*ein sich auf sich beziehendes Fürsichsein* である。同時に外への実在の関係である。つまり、特殊性すなわち刺激受容性の客観的世界に対する反省（映現、現われ出）である。個別のなかにあった生命の過程が外に出て客観性との関係へと移行する。

B. 生命過程 *Der Lebensprozess*

生命ある個体は以上のべてきたように自分自身を形

成してきた。こうして、この個体は自らの根源的前提に対して緊張した関係にたちいたることになった。このとき、生命ある個体はそれ自体で自立的に存在する主観 *das an und für sich seiende Subjekt* であり、客観的世界と対立している。この主観は自己目的である。また、概念である。つまり、この主観は自分のもとに従属している客観性を持ち、その客観性のなかに主観の手段と主観的実在性とをもつ概念である。こうしたことによって、この主観はそれ自体で自立に存在する理念 *die an und für sich seiende Idee* であり、そして本質的な自立的なもの *das wesentliche Selbständige* である。したがって、前提された外的世界は主観にとっては否定的なもの、非自立的なものにすぎない。これは生命のあるものにとっては対立する他在であり、自体的に存在する否定性である。生命のあるものの衝動はこの他在を揚棄しようとする。そして、自分にとっての他在と否定性とが存在するという確信の真理を獲得しようとする。個体は主観として、はじめはようやく生命理念の概念である。自分のなかにある、個体の主観的過程は個体がそこで自分をむしろ過程である。だが、この主観的過程と個体が自然的手段として自分の概念に適合させて措定する直接的客観性とはある過程によって媒介されている。そのある過程とは個体が完全に措定された外面性、すなわち無関心的に（無頓着に）自分と並列している客観的総体性に関係している過程である。

主観的過程は欲求とともに始まる。すなわち、生命のあるものが第一に自己を規定し、自己を否認されたものとして措定し、かつこうすることで自分の他者である客観性と関係するというこでもって始まる。— しかし第二に生命のあるものはこのような自分の喪失のなかでも自分を失わず、自分を保持し自己同等的な概念の同一性を維持しようとする。このことによって、生命のあるものは衝動である。自分にとって他なる自立的世界を自分と同等なものとして措定しようとし、その世界を揚棄し、自分を客観化しようとする衝動である。こうして生命のあるものの自己規定は客観的外面的なものとなる。と同時に生命のあるものは自分と同一的である。だから、生命のあるものは絶対的矛盾 *der absolute Widerspruch* である。絶対的矛盾とは自己同一性と自己否定性との矛盾である。自己同一性という直接的な形態は単純な概念のなかにある理念である。概念に適合した客観性である。しかし、自己否定性は自分を客観的特殊性として実在化する。こうして、理念の本質的二契機はそれぞれ自立的に総体性として実在化されている。「だから、概念は自分との絶対的不等性に二分されている。しかし、概念はこの二分のなかで絶対的同一性でもある。だから、生命のあるものはそれ自身として二分である。そして矛盾の感情をもつ。それが苦痛である。したがって、この苦痛は生命のある自然物の特権である。……矛盾は生命のあるものの苦痛のなかでまさに現実的に存在しているのである。⁽⁷⁾」

生命のあるもののなかでのこのような切り離し diese Diremption が感情 das Gefühl である。というのは、この切り離しが概念の単純な普遍性、すなわち感受性のなかにとり入れられているからである。苦痛から欲求と衝動とが始まる。両者（分裂項）が移行する。それは自分自身の否定としてある個体が同一性にもなるということである。この同一性はあの否定（苦痛）の否定としてのみある。— すなわち衝動そのもののなかにある同一性は生命のあるものそのものの主観的確信である。このとき生命のあるものは外的に無関心的（無頓着）に現実存在する世界、すなわち現象としての、非本質的現実性としての世界に関係する。したがって、この外的現実はずまず内在的目的である主観によって概念を獲得する。つまり、この規定に対するそして目的に対する客観的世界の無関心性（無頓着さ）は、実は主観に適合しているということである。だが、客観的世界は生命のあるものに対して無力である。— まずはじめに、客観は生命のあるものに対して機械的に作用することができる。しかし、機械的に作用するのではない。客観は原因として作用するのではなく、生命のあるものを刺激するのである。生命のあるものは衝動であるから客観はそのなかに働きかける。というのも客観がそれ自体で自立的に生命のあるもののなかに存在しているかぎりである。「だから、主観にたいする作用が成立するのは主観が自分に提供される外面性が自分に適応しているのをみいだすかぎりにおいてである。⁽⁸⁾」

主観が客観に強制力を行使する。このとき、主観は外的存在に関係しており、同時に主観が外的存在、道具となっているともいえる。これが主観の特殊的性格、主観の有限性である。こうした主観の特殊性と有限性とはこの関係がつくりだす現象である。— この現象のもとでの外的なものは客観性一般で、その過程（作用の仕方）は機械的關係と化学的關係である。しかし、外的なものは内面性に転化される。つまり、外的合目的性は揚棄される。というのは、客観は概念に対してなんらの実体でもないから、概念が客観の本質そして内的な規定として自己を措定しなければならないからである。

このように客観は征服され、機械的過程は内的過程に移行する。こうして個体は客観を得、自分の手段とする。自分の主観性を実体として客観に付与する。これが同化 die Assimilation である。これが上述の個体の再生過程と一体となって現われる。個体はこの過程のなかでまずはじめに自己を消耗する。というのは、個体はその客観性を客観とするからである。つまり、個体の肢体と外的諸物との機械的、化学的闘争は個体の客観的契機だからである。この過程の機械的なもの、化学的なものは生命のあるものの解体の始まりである。「しかし、生命はこの過程の真理であり、そして生命のあるものとしてこの真理の現実存在であり、真理の力である。だから、生命はこれらの過程を包みこんでいるとともに、この過程をこの過程の普遍性として貫ぬいている。この過程の所産は

生命によって完全に規定されている。これらの過程の生命のある個性性へのこのような転回は生命のある個性性の自分自身への還帰を意味する。それゆえ、そのものとして他者への移行である生産が再生 die Reproduktion となる。この再生のなかで生命のあるものは自分自身と同一的なものとして措定される。⁽⁹⁾」

直接的理念は概念と実在性との直接的同一性である。客観的過程によって生命のあるものは自己感情をもつにいたる。というのは、生命のあるものは自分をそれ自体で自主的にあるものとして措定しているが、しかしそのことが同時に無関心な（無頓着な）ものとして措定された自分の他在のなかで自分自身と同一的であり、否定的なものの否定的統一であるということにおいてなされているからである。つまり、自己矛盾のなかにあるからだ。「個体と個体にとって、はじめは無関心的なもの（無頓着なもの）として前提されている客観性とのこのような関連のなかで、個体は、一方では現実的個性性となるとともに、自分の特殊性を揚棄し、普遍性へと高まる。個体の特殊性は分離にもとづいて成立した。その分離とは生命が個別生命とこの個別生命にとっての外的客観性との二つの種として自分を措定することだ。ところが、いまや生命は普遍的な生命として、類として自分を措定した。⁽¹⁰⁾」

C. 類 Die Gattung

生命のある個体は、生命の普遍的概念からはじめは分かれたもので、まだ自分自身によって確証されていないものであった。生命のある個体は前提されている世界と関係し、自分をそれと否定的に統一した。また自分を自分自身の基礎として措定した。いまや、生命のある個体は理念の現実性、現実化したものである。以前には、概念だけから現われ出たにすぎなかったのだが、いまや現実性から自分を生み出した。こうして個体の生成 die Entstehung は、以前には前提することであったのだが、つまり他在との関係によって自己を生成することであったが、いまや個体の生産 die Produktion にとって変わる。

生命のある個体は客観との対立を揚棄することによって一歩進んだ規定を得る。類という規定である。それは個体と客観（無関心的他在）との同一性である。客観の同化である。だから、類とは実体的普遍である。しかし、理念とはそれ自体で本質的同一性、普遍そのものであるから、個体と他在との同一性とは理念の特殊化である。つまり、個体は潜在的には類でありながら直接的には個である。こうして実体的普遍としての類は同じ類との自己関係である。類としての個体同志の関係となる。個体同志が実体的普遍だからだ。特殊化とは主体と同じ類に属する他の一つの主体との関係である。したがって、これは理念の切り離し Die Diremption である。この切り離しは、それが出て来た源である総体性からみると個体の二重化（雄と雌）⁽¹¹⁾である。— これは客観性を前提す

ることであるが、その客観性とは他の個体である。だから、前提するとは生命のあるものと生命あるものとの関係であるということになる。

この普遍は生命の第三段階で、生命の真理である。しかし、この段階は生命の領域内のことで個体が自己へと関係する過程である。ここでは第一に、外面性（客観性）は個体の内在的契機である。第二に、この外面性はそれ自身が生命のある総体性としてひとつの客観性である。客観性とは個体にとっての個体そのものだ。この客観性のなかで個体は揚棄されるものとしてではなく自分は存続するものだという確信をもつ。

こうした類の関係は矛盾である。というのは、この類の関係は他の個体のなかでの自己感情の同一性だからだ。矛盾は衝動である。— 類は生命概念の完成である。しかし類はなお直接的なものにすぎない。直接的客観性という形式をもつ概念にすぎない。だから、この普遍性は個別的な形態としてあるものである。したがって、個体は潜在的には an sich 類なのである。しかし自覚的 für sich には類ではない。つまり、個体に対し存在するものはようやく他の個体である。だから、自分と区別されている概念が対象としてもっているものは概念そのものではなく、外的客観性をもっている概念である。したがって、直接的な交互形式が存在する。

個体の普遍性、つまり他の生命のあるものとの同一性は内面的、主観的同一性にすぎない。だから、自分を普遍として実現しようとする欲求 das Verlangen をもつ。類のこの衝動は両個性の揚棄で実現される。第一に、個体の欲求が満たされ、個体が類的普遍性のなかに解消されるとき、このとき個体同志の同一性が実現されるのだが、この同一性は二分から自己へと反省する類の否定的統一だ。そのかぎり、この同一性は生命そのものの個別性で、現実的理念から産出されたものである。第二に、しかしこの同一性ははじめには概念にすぎず、客観化しなければならない。しかし、この同一性は現実的概念で生命のある個体の萌芽である。この萌芽のなかには概念であるところのものが含まれている。というのは、この萌芽は個性の完全な具体化であり、種々の側面、諸性質、有機的諸区別が含まれているからだ。この萌芽は概念という内的形式における全体的な生命である。

類の自己への反省はこの側面からすれば、類が現実性を得ることである。というのは、否定的統一の契機と個別性とが現実性のなかで措定されているからだ。— これは種属の繁殖 die Fortpflanzung である。理念はいまだ生命として直接的形式のうちにあり、そのかぎり現実性へと還帰する。これが理念の反省であり、反復であり無限の前進である。この前進のなかで理念は直接性としての有限性から脱却出来ない。しかし、この還帰は高次の面をもっている。つまり、理念はより高次の定在の形式へと自分を高める。

類の過程のなかで両個性が自分たちの直接的現実存在を相互に揚棄しあう。そして、ここに生じる否定的統

一のなかで死んでゆく。他方、所産 das Produkt をもつ。実在化された類をつくり出す。類の過程において両個性が没落し、そのなかで類の自己還帰という否定的同一性が形成される。これは一方では、個別性の産出であるが、他方では個別性の揚棄である。このように、この同一性は自己と合一する類であり、理念の普遍性、理念が自立的となる普遍性である。性交において生命のある個性の直接性は死ぬ。それは精神の出現である。すなわち類として即自的 an sich である理念は向自的 für sich になる。つまり、理念が生命のある種族という自分の特殊性を揚棄し、一つの実在性を自分に与える。これが単一な普遍性 die einfache Allgemeinheit である。自分が自分に理念として関わる理念であり、普遍的なもの das Allgemeine である。普遍的なものは普遍性を自分の規定として、また定在としてもっている。— これが認識の理念 die Idee des Erkennens である。

注

(1) Hegel, "Wissenschaft der Logik" 2 (WdL2)

Suhrkamp 版 S462、寺沢恒信訳『大論理学』3（以文社版）

(2) S468, 263 頁

(3) S471, 268 頁

(4) S472, 269 頁

(5) S473, 270 頁

(6) S478, 276 頁

(7) S481, 279 頁

(8) S482, 280 頁

(9) S483, 281 頁

(10) S484, 282 頁

(11) S484, 282 頁